

2019年12月22日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「なるがままに」

聖書：ルカによる福音書1：26～38

クリスマスおめでとう。ただキリストの誕生物語は、決して“めでたい”話ではない。マタイ福音書が記すクリスマス物語は、ヘロデ王の時代にイエスが誕生したと記し、そのヘロデ王は、キリストの誕生に「不安」を覚え、自らの心の不安を取り除く為に、ベツレヘム地域に住む2歳以下の男の子を一人残らず殺した。

ルカ福音書のクリスマス物語も、一人の若き乙女マリアが、天使ガブリエルの受胎告知を受けて神の子を宿す。マリアは、ヨセフと言う婚約者がいた。にもかかわらず、婚約者以外の子を宿す。この物語には、そういう社会の構図の困惑を“背負う”という背景がある。まして、当時のユダヤ社会は、もしそのような事が起きたら、相手方の訴えによっては、石打の刑、すなわち処刑されてしまうという事であった。ちなみに、逆に男性がそのような浮気をしたという場合は、殆ど罰せられない社会構図になっていた。家父長制度の男性有利な社会にあって、女性はこの世の弱者、小さき者とされた状況が見える。

その状況の中で、マリアは天使ガブリエルから「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」…マリアはこの言葉に戸惑うが、…天使は言う。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産む、その子をイエスと名付けなさい。…マリアは天使に言う。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。…神にできないことは何一つない。」…マリアは言った。「わたしは主のはしのためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」…マリアは、この状況を受け入れる。それは何を意味するのか？

マリアのイメージに、若くて可愛らしい、素直な乙女ということはないか。それは、悪く言うと、単純な素直さ、主体性のない従順さ、というふうにも聞こえる。このマリアの言う「お言葉どおり、この身に成りますように(“Let It Be”なるがままに)」という言葉には、決してそのような軽い意味ではない。家父長制度の女性差別の社会にあって、小さくされた者が、神の御旨のなることを信じ、覚悟を持って、そして希望を持って、困難な運命を引き受けていく。マリアはそう決断したのである。それは、「主があなたと共におられる」と言う言葉を信じたがゆえである。クリスマスにはそのような意味がある。(神谷)